

図書館だより

第29号 令和3年3月発行



大島商船高等専門学校図書館
山口県大島郡周防大島町大字小松1091番地1

目 次

巻頭言

読書とお薦めの本	図書館長	角田 哲也	1
----------	------	-------	---

第 18 回読書感想文コンクール優秀作品発表

最優秀賞

非色を読んで	情報工学科 3 年	片野 萌永	2
--------	-----------	-------	---

優 秀 賞

自信	電子機械工学科 3 年	石田 笑美里	3
----	-------------	--------	---

佳 作

やりたいことをやれ	商船学科 1 年	田中 智也	4
非色を読んで	商船学科 2 年	道中 諒人	5
羊と鋼の森を読んで	電子機械工学科 2 年	松田 華奈	6
島はぼくらとを読んで	電子機械工学科 3 年	江本 一步	7

推薦図書

君たちはどう生きるか	一般科目	島田 雄一郎	8
話しベタさんでも伝わるプレゼン	情報工学科	尾崎 南斗	9

ブックハンティングに参加して	10
----------------	----

図書館利用状況	13
---------	----

※表紙写真：第 18 回読書感想文コンクール表彰式（校長室にて）

巻頭言

読書とお薦めの本

図書館長 角田 哲也



11 月に図書館関係の行事であるブックハンティングを広島市で実施しました。学生が広い店内で本を手をしている姿を見て、最近、読書をしていないことに対する罪悪感に気づきました。そこで、自分の過去の読書から得られたこと及び推奨する本を一冊紹介します。

私自身の読書らしい(?)初めての体験は小学校の低学年でした。読書感想文を推進するため、読書感想文を提出すると、掲示板に掲示された名前の箇所にシールが貼られました。そのシールの量を同級生と競って多くの本を読みました。今になってみれば、大人の策略に見事にはまったわけですが、結果的には読書をする癖がついてました。その後、中学校卒業まで毎日本を読みました。本の内容は多様でしたが、SF 小説が特に好きで、文字が頭の中で映像になり内容を理解する癖が付き、すっかり妄想癖がつかしました。この点は今でも少しだけ役に立っています。専門書を読む際は数式で理解すると同時に自分なりに現象をイメージとして膨らませて理解を深化します。実際、講義では日常生活の例の紹介や図を描いてイメージを湧かせる工夫をしています。月並みですが読書を通じて漢字の読み書きも得意になり、中学校までは一番好きな科目は国語でした。しかし、理由は割愛しますが、高校進学をきっかけにほとんど読書をしていません。

最近 10 年で読んだ本は科学者の研究生活に関する本ばかりです。一流の研究者はどのような生活を送り、どのような考えで研究成果を挙げたのか?に関心を持ちました。ノーベル賞を受賞した小柴先生と中村先生の本を読みましたが、個人的には中村先生の本(考える力、やり抜く力 私の方法、三笠書房)が心に響きました。中村修二先生は 20 世紀中には絶対無理と言われてきた高輝度青色発光ダイオードを誕生させた研究者で、実験設備が整っていない企業で愚直に研究を進め、学会からも冷たい目で見られていたようですが、偉大な成果を収めました。中村先生は地方国立大学出身者で、有名な大学の大学院の不合格や有名企業の不採用を味わったせいか、有名大学出身者に対してかなり敵対心を抱いていることが書かれています。本の中に有名大学出身者は研究面では使えないので、助手は有名大学出身以外の者を採用すると記述されています。有名大学出身者は知識が多いので、研究する前に文献などを調べ、“この研究は・・・の論文で・・・と書かれており、研究する意味がない”と結論を出すため使えないとのこと。全てが当てはまるとは思いませんが、ある意味共感できます。また、すでに周知されている事実を深く理解する作業が研究に対するアイデアの着想する原点でもあると記述されていました。この点については私の研究指導教官から同様の事を言われたことがあります。毎年同じ講義をしているうちに専門書に書かれている内容に疑問を感じることもあり、その点を深く調査することにより新たな研究テーマが生まれ、論文に繋がる。したがって、“講義を大切にしてください”と言われました。残念ながら、私はその域まで到達できませんでした。私はメンタルが弱った時は中村先生の本を読み返して、心をリセットしてきました。学生の皆さんは仕事の内容こそ中村先生と異なれ、社会人になって壁にぶつかったときには是非読んでいただきたい本です。

最優秀賞

非色を読んで

『非色』 有吉 佐和子著 角川文庫

情報工学科 3 年 片野 萌永

私は、「非色」という本を読んだ。この本は、世の中の人種差別と、自分の中にある「差別を起す心情」を鋭く書いており、主人公の慟哭が聞こえてきそうな作品だ。ストーリーも凝っていて、伏線も効いているし、話の中に引きずり込まれた。図らずもまた、人種差別について考えることになった。戦後、アメリカ兵（非白人）と結婚しアメリカに渡った日本人女性の過酷な運命。避妊もままならない社会でたくましく生き抜く笑子に比べ、黒人よりもさらに下層に置かれていたプエルトリコ人と何も知らずに結婚した麗子の人生があまりにも哀しかった。書かれたのは昭和四十八年だが、差別用語が普通に使われていた隔世の感がある。でも今は言葉や体裁を取り繕って表面から見えなくなっただけかもしれない。白人は黒人を見下し、黒人はプエルトリコ人を見下す。そして同じ白人でもイタリア人、ユダヤ人でさらに差別意識があり、話の最後では同じ日本人の主人と使用南限での格差意識がある。今でもこういう差別意識はなくなっていないんだらうなとすごく感じた。

つい最近でも、白人警察官が路上で黒人の首を膝で「8 分 4 6 秒」抑え続けて殺すというニュースがアメリカだけではなく日本でも話題となった。抗議デモがアメリカ全土で起こり、人々は押さえつけられて亡くなった黒人のフロイド氏が繰り返した「I can't breathe!」（息ができない！）及び「Black Lives Matter!」（ブラック・ライヴズ・マター）を連呼した。平和的なデモがある一方、デモ隊と警官との衝突、商店の略奪が起こった。デモ開始から数日後、主犯のデレク・ショウヴィンは第二級殺人容疑、ほかの三人の警官（うち二人はアジア人）は第二級殺人法で起訴された。この法に人々は喜んだが、デモはそのあとも続き、警察からデモ隊の暴力はますます激しくなっている。

多くの白人もデモに参加する中、高齢の白人男性が警官によって押し倒されて後頭部を打ち、集中治療室に運ばれた。白人の大学生は警棒で頭を殴られ、二十針縫った。現場取材するジャーナリストへの警官による過剰な暴力も多々見られ、ゴム弾を受けて失明した女性ジャーナリストがいる。少なくとも十一人が亡くなっているといわれている。人間は誰かを蔑まないと生きていけないのだろうかと考えさせられた。色ではない。ある集団を構成する人が、その中で何らかの差異を見つけ、それによって優劣をつける。その差が差別にならないためにはどうしたら良いのか。優劣がつかないためにはどうすれば良いのか。その差を比べるための尺度の種類が少なければ少ないほど、その地位は固定され、絶対的になっていく。その種類が多ければ多いほど、こちらはあの人の方が優れているがこの部分はこの人が優れている、となって、優劣が付きにくくなるのではないだろうか。

問題は、色に非ず。辛い境遇を耐える方法が自分以下の存在を見つけることだけというのは、どうしようもない人間の性なんだろうか。経験や能力だけではなく、生まれや階級といったぼんやりしたものに基づいて生きている様は滑稽なのに、自分もその評価体系の中に組み込まれているということを考えさせられた。人種など生まれについて改めて考えたが、生まれについての特徴はわかりやすい比較対象であり、下の階級はさらに下の階級を見つけるという人間の本性をついている。そして、ニューヨークで暮らす戦争花嫁たちを通じて女性の奥深いところを描いていると思う。逞しく生きていた笑子が、唯一泣き崩れる場面がとても印象的だった。

この本を読んで、人種差別の重さを知った。差別される側も差別をする。人々は差別から逃れられないのだろうか。常に何かを見下しながら生きていく。けれど私は、人間に上下はないとか、人は皆平等だとか、そう思う人間でありたい。他者の存在に対して自己の優位性を感じるときにある種のエネルギーがわいてくるという笑子の心理描写に触れたとき、その感覚が私にもあることを否めなかった。それを全部背負って凜と生きる笑子がまぶしかった。私もそのような人間になりたいと強く感じた。

優秀賞

自信

『羊と鋼の森』 宮下 奈都著 文春文庫

電子機械工学科 3 年 石田 笑美里

私には自信がない。面倒くさがりで、自分自身の性格に嫌気がさす時がある。この本はそんな人達に読んで欲しいと思う。自信がなく、あらゆる出来事に対して気が引けてしまう。そんな人こそ、この小説を読んで少しでも、自分だけでなく周りの人達は自分の努力や良いところをちゃんと見ているのだと実感することができ、読む前より少し物事に対するチャレンジ精神や、一歩踏み出すということが出来るのではないかなと思う。

この世には様々な人間がいる。様々な職業がある。どんな職業でも私は人のためになっていると思っている。そしてこの本はその様々な職業の一つであるピアノの音程をチューニングする調律師の話である。

私はこの本を読んだ時、少しばかり疑いの目があった。なぜか。私は小説や漫画でピアノやギター、歌などの音を表現するという行為自体、懐疑的であり、タブーではないかと思っていた。これは目で読んで脳で理解する文学が、耳で感じ取り脳で理解する音楽をどのようにして表現し、音を感じさせるのか。この事に尽きていると思う。実際のところ、私自身漫画はよく読むほうであるが、音を伝えることをテーマにした作品というものは思い当たらない。そして、この本を読んで私は衝撃を受けた。音が聞こえる。音が感じ取れる。硬い音、温かい音、優しい音、強い音。これらがなぜか聞こえてくるのだ。いや、正確には聞こえないのだが、なぜだか感じ取れる。この小説は映画化もされており、私は映画も観た。すると、読んでいた時に感じ取れたその音が、映画を見た時流れてきた音と遜色がなかったのである。私はこれにまた衝撃を受ける。それから私は思いを改め、文章で音を伝えることに懐疑的であるなんて思いはもう一切無くなっていた。

この作品は当時高校生であった山奥に住む青年が体育館のピアノを調律しに来た調律師の調律現場を目撃し、そこから調律師になるという夢を叶える物語である。このエピソード序盤の肝は、やりたい事がなかった青年が調律師に出会ってからやりたい事を見つけ、調律というもの、ピアノというものにどんどんはまり、熱中していく様を描いている。そこに私は非常に感情移入でき、面白いと思えた。

調律師になる夢を叶え、見習いとして上司と共にいろいろな調律現場に行く場面がある。そこで出会った二人組の女子学生が弾いたピアノで自然を感じることが出来る音が聞こえてくる。主人公は元々山奥に住んでいる家柄でその事を思い出すのだが、その音がとても感傷に浸れる音であった。その音は私がこの小説を読んで最も美しいと思った音色であった。湿っているコケや、生い茂っている木々、川のせせらぎ。これらが音から聞こえてくる。つまりこの小説は文字で読み、脳で理解し、音を感じ取り、さらには風景まで想像できてしまう作品なのである。また、この小説の舞台は北海道で雪が多く積もっている地域なのだが、その主人公がいた森林には雪が全く積もっておらず、その比較も良いコントラストになって非常に美しいものであった。

この作品のもう一つの良いところは、先ほども述べたが、感情移入がしやすい点である。自分に自信がない人、思い切りが出来ない人など個性溢れる登場人物が出てくる。その中でもやはり主人公に移入しやすい。主人公は中盤、調律の件で挫折してしまう。そこで様々な人に助けられ、自らの調律のスランプを脱出する。ここで、対象はなんでも良いから何かに一歩踏み出すことが大事なのだと改めて気づかされる。それは自分の努力や良い行いなどはだれかがきくと見ていると、この本を通じて実感出来たからである。人の為に行ったことは自分の為にもなる。だから、もっと自分に自信をもって様々な事にチャレンジしてみようと思えた。

この本を読んで私は、読む前より少しばかり自分に自信を持つことができ、何か行動を起こそうと思えた。読み終わった頃には読む前より自身が少しばかり変わったと錯覚できる。そして、その錯覚で何かアクションを起こせた時、初めて変わったんだと、錯覚ではなく自信をもって言えるのだろう。

佳作

やりたいことをやれ

『やりたいことをやれ』 本田 宗一郎著 PHP 研究所
商船学科 1 年 田中 智也

「やりたいことをやれ」という言葉は、とても力強く背中を押してくれる言葉だと思う。尊敬できる存在の人にこの言葉をかけてもらったら、どうしようかと迷っていても、やれるだけ恵まれている、やれるところまでやってみようと思うだろう。

私は中学三年間、陸上部短距離に所属し、数々の大会にも出場でき、充実した部活動ができた。小学生の時は特に走るのが好きだとか、もっと速くなりたいとか思ったことはなかったのだが、小学六年生のときの先生の一言が私を大きく変えたのだと思う。私は小学校対抗の陸上大会に誘われて、男子リレーのアンカーを務めた。ぶっちぎりでテープを切った瞬間、大きな歓声が上がり、多くの視線を感じた。そのあと先生が駆け寄ってきて、「もっと速くなるよ。きっと。陸上やってみるといいよ。」

と言ってくださった。そのときから私のやりたいことが決まった。中学生になったら陸上部に入ろう。そしてたくさん練習して速く走れるようになりたいと思った。自分のやりたいことが見つからない、何が自分に向いているのかわからない、という悩みはみんな持っていると思う。そんな時、周りの人たちからかけられる言葉や、読んだ本の内容とかが背中を押して、前に一歩進む勇気をくれるのだと思う。

本田宗一郎の言葉で「チャレンジして失敗を恐れるよりも、何もしないことを恐れる。」という名言がある。これは母が好きな言葉で、何度も資格試験を受験して、落ち続けたときに会った言葉だそうだ。パソコン台の所に一時期貼っていたので目にすることがある。失敗しても、どうしようもなく暗く落ち込んでしまっている、自分を奮い立たせてくれる言葉は出会うべき時に用意されているのかもしれないと思った。

今回、この課題図書なかで「やりたいことをやれ」を選んだのはタイトルの力強さにひかれたことだ。たくさんさんのエピソードを読んでみて感じたことは、相手の思いやり、相手の立場に立って考えることを大切にしていること、若者の未来、可能性を心底信じているなどと思った。会社を大きくする経営者は、会社の利益の裏で、努力と挑戦をし続け、若者を信じ、励まし、行動する姿を示す人格者でもあると思った。

私は、この本の中で「得意に帆あげて」という言葉が気に入ったので、調べてみた。帆を上げるとはどういうことを比喻しているのか知りたくなった。この言葉は社報に掲載された本田宗一郎の言葉で、得意なことに夢中で打ち込んで、自分の得手不得手を包み隠さず、はっきり表明することが大事であるという意味である。社報には、まるで詩のような文が載っていた。

企業という船にさ
宝である人間を乗せてさ
舵を取るもの
櫓を漕ぐもの
順風満帆
大海原を
和気あいあいと
一つの目的に向かう

こんな愉快的航海はないと思うよ。私は船が好きだ。将来は外航船に乗って世界中で仕事したいと思っている。私が船や海を好きになったのは、マルハのトロール船で一等航海士をしていた祖父の影響もある。祖父は私が小学一年生の時に亡くなった。海に磯遊びに行ったり、船を見に行ったりとても私をかわいがってくれた。今生きていたら、私にどんな言葉をかけてくれるのだろう。長い航海の中で楽しかったこと、つらかったこと、仲間との思い出をいろいろ聞きたかった。将来、就職して働きだしてから悩みをいつもの優しい笑顔で聞いてくれたら。誰よりも私の可能性を信じ、やってみろと背中を押してくれる言葉をかけてくれていただろう。

将来就職する会社が本田宗一郎の言葉のように、若い人の可能性を信じ、やってみろと背中を押してくれる仲間意識の高い会社であってほしいと思った。将来就きたい職業がある、その夢を叶えるための学校に通っている、同じ目標を持つ友達がいる、応援してくれる家族や先生がいる。恵まれた環境にいる今、しっかりと将来を見据えて学んでいきたいと思う。将来、「やりたいことをやる」ために今できることを精一杯やるのが大事だと思った。

佳作

非色を読んで

『非色』 有吉 佐和子著 角川文庫

商船学科 2 年 道中 諒人

「差別」について考えさせられた。生まれた国が違うからか、肌の色が違うからか、同じ人間なのに、いったいなにが違うのだろうか・・・

人種差別ときいて、まず思ったのは、やはり肌の色だ。日本で過ごしていると、それは遠い国の話のようだ。しかしニュースで「ブラック・ライヴズ・マター」運動を知った。黒人の命も大切だ・・・この運動は世界的な広がりを見せている。きっかけは、アメリカミネソタ州で起きた白人警官によるジョージ・フロイド暴行事件だ。私はそれをテレビの報道で知った。どうしてこんな事件が起きるのか、日本ではまず考えられない。私のイメージする黒人は、背が高く、スポーツ万能で歌が上手。しかし一方で、怖いとも思う。それは、国が違うからなのか、それとも、やはり肌の色が違うからそう思うのだろうか。では白人はどうだろうか。黒人よりも少し馴染みやすい気がする。が、やはり怖い。そして、黒人も白人も、他の外国人も同じ「外国人」だと思った。それならなぜあの事件は起きたのだろうか、なぜアメリカでは黒人は白人に見下されるのだろうか。この本の中で、白人は黒人を、黒人はプエルトリコ人を見下す。しかし、プエルトリコ人の見た目は白人なのだ。なぜ？肌の色は関係なかったのだろうか。その答えは階級だった。社会が作った階級。それが、差別の原因となっているのだと、この本には書かれている。

日本では差別はないのか。差別の原因が、社会にあるとするならば、日本でも差別はあるはずだ。調べてみると、江戸時代には、すでに武士を支配身分とする職能に応じた身分が編成されていた。そして、明治維新後、旧百姓・町民身分は平民とされ、華族・士族との結婚や移住・職業選択の自由が認められた。被差別身分についても、明治4年、呼称が制度上廃止され、身分・職業ともに平民と同様とされた。しかし、華族・士族・平民を分けた身分意識や、被差別身分であった人々に対する差別や排除は残ったという。社会が作った階級だ。日本にもそんな歴史があったのだ。しかしそのことを身近に感じることはあまりない。それは、私たち日本人の肌の色が同じだからかもしれない。そうすると、誰も知らないところで、社会から差別されている人がいるのかもしれない。悲しいことだ。社会に存在する差別は、人がつくり出したものなのだと思う。人間は、自分より下の人間をみつけて、優越感を覚える。いつも誰かより優越感を感じていたいのではないか・・・悲しいことに、その優越感がわからないわけではない。そんな自分が情けなくなった。

今、日本では「コロナ差別」が問題になりつつある。コロナウイルスに罹った人への差別や中傷が後を絶たないのだ。誰もが感染する可能性があり、憎む相手は人ではなく、ウイルスなのに、なぜこんなことが起きているのだろうか。今こそ、正しい情報を持ち、冷静に行動することが、求められている。そうしなければ、優越感がまた差別をつくってしまうのだから・・・コロナウイルスに罹った人を、罹っていない人を見下してはいけないと思う。

差別をつくり出すのが、人であるのならば、変えることが出来るのも、人であると思う。「非色」色にあらず。この本のタイトルだ。目に見えるものや、社会がつくったものに惑わされることなく、自分の目で見ること、感じること、意見を聞くこと、そして相手に思いやりを持つこと。この本は、過酷な現実を受け入れ、そして前を向いて明るく生きることの大切さを、私に教えてくれた。変えることのできないこともあるけれど、変えていく気持ちは、力になり、そしてそれが、差別をなくしていくのだと。

差別は、今、インターネットという新しいかたちで起きている。私は、世界中の小さな声を簡単に聞くことが出来る。一方で、間違った情報に振り回されていることもある。いま私にできること。非色。心無い言葉を、一瞬であふれさせることができる今、少しずつあたたかい言葉であふれる世界になればいいと思った。

佳作

羊と鋼の森を読んで

『羊と鋼の森』 宮下 奈都著 文春文庫

電子機械工学科 2 年 松田 華奈

「羊と鋼の森」は、綺麗で、淡々と、静かに進む物語だ。濃い色はついていなくて、微かな匂いがするよう。一年前、最初に読んだときと、それは少しも変わらず、そのときは、この本が少し苦手だったことを覚えている。どこか、虚しさを覚えたことも。

この本で主に出てくるのは、ピアノを中心とした人物だけだ。新人調律師にその先輩、主人公が調律師になるきっかけでもあるチューナーにお客さんの双子。他は、彼らの友人や両親さえもほとんど描かれず、ただ、ピアノを中心に人が登場する。

全員年齢が違い、性格が違い、ポリシーや趣味も違う。同じところを探すのが難しいほどだ。彼らの唯一の共通点はピアノで、それがなければ、会ってさえいなかっただろう。だけれども、彼らは会話を交わし、共に仕事をしたり、その仕事の感想を言ったりする。

彼らが、それほど自然に共にいるのは、ピアノから離れられないからだと思う。彼らにとってピアノは焦がれるものだったり、憧れの象徴、トラウマ、自分を出す手段の一つ、その他様々なものだったりする。でも共通してピアノに惹かれ、その美しさを知っている。

それほどまでに人を集めるような、綺麗なものを私は知らなかった。この本を読むまでそんなものがあると考えたことさえなかった。そして、彼らはピアノに対して、ひた向きに、そして真摯に向き合っていた。

例えば、主人公の外村は、高校生の頃にピアノに魅入られる。自分に向かって来た確かな音と、その「いいもの」だと思ったピアノを忘れることが出来ずに、専門学校に入り、調律師になる。

彼は、ピアノがあったからそう生きようと決めた。それほどに大きな決断をすることは、私にとってはとても怖いことだ。でも彼は、迷わずに、そして決断に後悔もせず、調律師の道へと進む。

彼は調律師になっても、お客さんに合った音にするために、手探りをしながらも努力する。「無駄」の言葉を知らないように。その姿は、私には少し眩しすぎるとも思う。

それは外村だけではない。外村の先輩、秋野さんは、昔は、ピアノを演奏する側の人間だった。でも、自分のピアノに終わりを覚えてしまい、調律師になる。彼にとってピアノは挫折の象徴のはずで、彼自身、調律に向き合うことは言わない。「調律は、型にはめてすればいい」。そんな言葉から、調律を渋々しているような感じまでする。しかし、彼は、調律は真面目に行う。たとえ全力を出さなくても、その行動の端々にはピアノへの愛と尊敬がある。調律師だけではない。双子の高校生、和音と由仁は依頼をする側である、お客さんだ。二人とも、それぞれが生き生きとしたピアノを弾く。外村も、二人を通して益々、自分の仕事について考えるようになる。

でもある日、双子の一人がピアノを弾けなくなる。ピアノが心から好きだった双子を想像して、外村は、「和音が残ってくれ」と思う。彼女のピアノの方が好きだったから、悪意なく、でも確かにそう思ってしまうのだ。

結局、弾けなくなったのは由仁だった。落ちこみ、ピアノを弾かなくなった和音は、それでもまた、ピアノを始めることにする。その決断と彼女のピアノは、外村も由仁も救う。

その後、和音はピアニストを、由仁は調律師を目指そうと決めた。それを自身で決めた彼女らは、やっぱり強くて、真摯なのだ。読んでいながら、私がなぜ一年前、この本を苦手だと思ってきたのか分かりだした。私が知らないほど美しく、いいものを彼らは知っている。そして、それらに向き合い、追っている。それらは全部私にはなくて、それに虚しさを覚えていたのだ。

私にとって好きなものは沢山あるし、憧れるものだってある。そのことについて、友達と話し、盛り上がることもある。たぶん、それら一つ一つは、誰かににとっては美しく、よく、果てないほど心惹かれるものなのだろう。でも、私は、それらがそうだと、どうしても思えない。

もしかするとそれは、私がそこまで踏み出す勇気がないだけかもしれない。少し憧れたものに対してでさえ、それを諦めないことは難しい。美しいものは遠くから見ただけでも美しいし、踏み込まなければ傷つかない。でも、私は、そうしていると、いつか行き詰まることを知っている。上辺だけで生きていても、どこか虚しいままなのだと、なんとなくそう分かっている。だから、真っ直ぐなこの本の中の彼らが眩しく見えるのだ。

彼らのように、私も、私の「美しいこと」にもう少し真っ直ぐに向き合ってみたい。それで後悔するとしても、いつかは、彼らのように、「美しいこと」で、他の人と繋がる日が来るなら、いいなと思う。

佳作

島はぼくらとを読んで

『島はぼくらと』 辻村 深月 著 講談社文庫

電子機械工学科 3 年 江本 一步

人口がわずか二万人の、瀬戸内の小さな島に、私は住んでいる。ここに生まれて、十八年間暮らしている生粋の島っこだ。

私は小さなころから島が大好きだった。二歳ぐらいからプールや海で泳ぎ始め、夏休みは、毎日毎日海へ通っていた。海へ行くと、いつでも知り合いの人が必ずいた。地域のおじいちゃんだったり、約束をしてないのに集まっている友達だったり、海へ行くと退屈をすることはなかった。島では泳ぐだけが遊びではない。泳ぎに行くと同じ頻度で、魚つりにも行っていた。基本は、祖父が船を出してくれた。祖父が不在の時は、地域のお年寄りが道具を貸してくれることも、少なくなかった。島はとても居心地がよく温かかった。

この物語に登場する、朱里、衣花、源樹、新の四人も瀬戸内に浮かぶ島「冴島」で暮らしている。原樹は島を活性化させるためによそからの移住、いわゆる「I ターン」で冴島へやってきた。冴島には、源樹のほかにも多くの I ターン移住者がいた。複雑な家庭の事情でシングルマザーになった家族なども冴島へきた。

私の住む島も、I ターンをしてくる人が沢山いる。どのような理由でここへ来たのかはよくわからないが、「もともとは県外から来たんだよ。」と話す人が多い。また、U ターンで帰省してきて、島で働く人もいる。いずれにしろ、島の人々はとてもやさしく、誰とでも家族のように接してくれるため住みやすく、働きやすい島なのは間違いないだろう。

朱里、衣花、源樹、新の四人は冴島の中に高校が無いので、フェリーで本土の高校に通っている。本土の高校に通う朱里たちがフェリーで冴島に戻る途中、冴島に存在するという『幻の脚本』を探すために、I ターンしてきた作家の霧崎ハイジと出会う。怪しい雰囲気漂わせた霧崎ハイジを島から出ていかせようと、源樹は演劇部に所属していた新に、幻の脚本と偽った偽物の脚本を書かせた。それを渡すと、霧崎ハイジは島を後にしたのだった。

私の住む島には、いくつもの伝説的な逸話が残されている。二メートル二十七センチもある相撲取りがいたという話だったり、瀬戸内を司る荒ぶる龍を鎮めるために身を投げた人の話だったり、面白いものが沢山ある。中学校のころは、校外学習などで調べたこともあった。霧崎ハイジもこのような伝説的な逸話にとても興味があつたのだろう。私は、このような人こそが島へ I ターンで移住してくるべきだと考える。なぜなら、島は高齢化が進んでいるからだ。このように興味を持ってくれる人がいないとこれから語り継がれることがなくなるからだ。

四人は本土の高校へ通っているが、高校を卒業すると、大学への進学や就職など一人一人選ぶ道が大きく変わってくる。家業を継ぐか、島の役場の職員にでもなる以外、島には仕事がない。島の子供たちは皆、いつか島を出ていくことを考えながら育っていく。必ずしも、島に住む子供たちは私のように島が大好きでないと考える。わたしの中学校の頃の同級生の大半は、

「大人になったら島から出たい。」「東京とか、大都会で生活したい。」

などと言い続ける人ばかりだった。私も正直そのように考える時期もあった。今でも、必ず島で一生暮らしていくとは断言できない。どこに就職して、どこで暮らすかなどは私の中では、まだ不透明だ。島の生活は、確かに不便なことだらけだ。交通の便が非常に悪いこと、スーパーやコンビニが数カ所しかないことなどたくさんある。だが、私はその中で島でしかできないことを大切にしたいとかがえる。

島で働く大人の話の聞くと、都会に出た後に島の本当の良さに気づくと口をそろえて言う。島の人々の温かい心が恋しくなると言う。おじいちゃんおばあちゃんの「おかえり」が聞きたくなると言う。やはり、離れてわかる島の良さがあるのだろう。逆に言えば、離れなければ島の本当の良さがきちんと見えないのかもしれない。

私はまだ十八歳になったばかりの子供だ。周りの同級生が島の外へでていく中、高等専門学校のため、考える時間がみんなより少し多い。この本を通して、私の住んでいる島の人々の気持ちが前よりもわかった気がする。都会に出て経験を積むのも大事だが、自分の故郷の島を頭において、就職や進学を丁寧に決めたい。

地域の方々に「いってらっしゃい」と「おかえり」を言ってもらえるこの島が私は大好きだ。

教員推薦図書

君たちはどう生きるか

吉野 源三郎 著
岩波書店

一般科目 島田 雄一郎

本のタイトルから理屈っぽい内容を想像するかもしれませんが、そうではありません。通称コペル君という少年の成長の物語です。3年前にはマンガ版(本校の図書館にもあります)も出て話題になりました。

コペル君は、ある日デパートの屋上から東京の雑踏を眺め、自分と世界の関係に関する新たな認識を得ます。彼の成長を導く「叔父さん」に地動説の発見にも比されたその認識を基に、人間と世界と歴史に対する理解を深めるコペル君の「人生」が始まります。

本書は、「人間としてこの世に生きているということが、どれだけ意味のあることなのか」という人生上の本質的な問いを、一人の少年が日常的に経験する身の回りの出来事を通して読者に考えさせる内容になっています。このような問いに、価値観がきわめて多様化した現代において、納得のいく答えを見出すのは難しいことです。しかし、難しいからといって無意味であるわけではありません。著者は「君たちはどう生きるか」と我々一人一人に問いかけています。コペル君の物語を読んで、「君たち」はどうこの問いに答えるのか期待しています。

教員推薦図書

話しベタさんでも伝わるプレゼン

清水 久三子 著

翔泳社

情報工学科 尾崎 南斗

これまで「話が伝わらなかった、言いたいことがわかってもらえなかった」そういった経験はありませんか？ 「とても緊張していた、頭の中で情報が整理できてなかった」など様々な原因が想定されますが、「物事を正確に伝える能力」は多くの場面で必要になるスキルです。そこで今回、社会人にとって避けては通れない「プレゼンテーション」に注目した本を紹介します。

この本は人前で話すことが苦手な人が陥る原因と解決案を章毎に紹介しています。例えば緊張を和らげるためにはどのようにすればいいか？や発表時の話し方、話し口調に関することや発表内容の構成方法など幅広く取り扱っています。また、プレゼンにおける資料作りのコツや発表後の質疑応答などの対策についての紹介も行われています。大半のポイントが見開き 1 ページ以内で収まり、文章もそれほど多くないため、忙しい時でも合間合間に読むことができるのがこの本の特徴になります。

これまでプレゼンで辛い経験があった人、発表が怖い、苦手なだけでなく得意な人も是非読んでみてください。今までの経験を思い出しながら自己分析し、この本と照らし合わせることで新しい発見を見つけ、活かしてもらいたいです。

ブックハンティングに参加して

今回、初めてブックハンティングに参加してみ、ものすごく充実した時間だったと感じています。今まで、自分が手に取った事のないような内容の本に触れることが出来ました。他の学年の先輩や、他の学科の同級生との交流もあり、学校生活が充実するきっかけになったと思います。今までは、学校の図書館にはなかったような内容だけど、クラスみんなに聞くと意外と需要のあるものもあって、大島商船の図書館がもっと充実していくといいなと思いました。これからも、積極的に図書館を利用していきたいです。

商船学科 1 年 河村 七恵

今回のブックハンティングは、私にとってとても貴重な経験となりました。もともと読書が好きで、書店や図書館にはかなり頻繁にいくのですが、あれほど大規模な書店にいくのは初めてで、ぎっしりと本が詰まった棚が並んでいるのは、見ているだけで幸せな気持ちになりました。自分達の手で自分達が読む本を選ぶのは、とても新鮮なことでしたが、どのような本を選んだらいいのか、あまりにもたくさん本があるので、とても迷ってしまいました。事前にどのような本をいれてほしいのか、クラスメイトにきいてみたのですが、リクエストは特になかったので、今回選んだ本は、私が個人的に好きな本、気になっていた本になってしまい、好みが片寄ってしまいました。もし、来年も図書委員になることができたなら、今度は今回選ばなかったジャンルの本もいれてみたいです。

情報工学科 1 年 吉野 桜花

広島の大きな書店まで行って自分たちで図書室の本を選ぶことができると聞き、ブックハンティングを楽しみにしていました。新型コロナウイルスの影響で延期になるなど不安もありましたが、実際に行ってみると沢山の本の中から選ぶのは、悩みはしましたがやはりとても楽しかったです。日頃買いたくても躊躇するような、少し高価な本も選んでみました。図書館に入荷するのが楽しみです。

電子機械工学科 1 年 山崎 樟太

この度私はブックハンティングに初めて参加しました。図書館に新しく追加する本を自身で選べることに魅力を感じました。ブックハンティングするにつれてある程度追加したい本を考えていました。しかし、実際に書店に着くと同じジャンルでも様々な本があったので選ぶのに苦労しました。例外はありますが基本的に自由に本を選ぶ事が可能だったので、私の属する部活関連の本を選びました。時間は結構かかりましたが、図書館に追加したい本を選ぶ事ができました。良い経験となりました。機会があれば、また参加したいと思います。

商船学科 2 年 中野 大輔

今回のブックハンティングについては、そもそも開催できるのかも不安なところがありましたが無事に終えることが出来とても良かったです。一人が約、1 万円近く分の本を贅沢に選ぶことが出来て、とても楽しかったです。最初は、どのような本が最適なのかとても迷いましたが最終的に慎重に選択することが出来ました。また、なかなかこのような経験は無いので、とても有意義な 1 日を過ごせて本への親しみもさらに増したのでうれしかったです。ブックハンティングは、初参加だったので自分が選んだ本が図書館に入荷されるのは新鮮で貴重な体験でした。「緋弾のARIA」は自分が一番面白いと思うライトノベルなので、手に取ってくれた人が一人でも面白いと思ってくれたら嬉しいなと思い選びました。

電子機械工学科 2 年 大道 敬久

今回のブックハンティングで 3 回目の参加ということもあり時間配分をきっちり考えて回ることができた。最近の本屋さんに行く機会がめっきり減っていたので色々なジャンルにおいて新刊が出ていたのを眺めるのが至福で

今回は図書委員の責務である、ブックハンティングに参加させて頂きました。自分は今年が初めての図書委員でこのイベントをととても楽しみにしておりました。場所も事前に告知頂いた福屋のジュンク堂書店さんでとても大きい本屋さんであることは承知しておりましたが実際に行ったことはありませんでした。今回このような機会を頂けて行くことが出来とても嬉しかったです。うちの近くの小さな本屋とは規模が違う本屋さんですごく種類の図書に触れられてとても楽しかったです。来年も図書委員になって参加したいです。

情報工学科 2 年 弘埜 敬太郎

今回初めてブックハンティングに参加して今まであまり本に触れることがなかったけれど、学校の図書館に相応しい本を探すときにいろんな本に触れることができました。自分で本を探すのが大変だったので友達に聞いたり、クラスの人に聞いたりして本を探しました。他の人に聞いたりしたら自分では絶対に読まないようなジャンルの本だったり、見たことがない本などが挙げられたので本を探すのも楽しかったです。ブックハンティングに参加してよかったと思いました。

商船学科 3 年 加納 嵩也

福屋広島駅前店 10 階、ジュンク堂書店広島駅前店で行われたブックハンティングに参加しました。ジュンク堂に着くと、まず広さにテンションが上がります。広いだけでなく、一般文芸や専門書のみならず、絵本や漫画も豊富でした。僕が選んだ本は専門書寄りですが、以前に僕が読んで面白かった・参考になった本を選びました。どの本をとっても一押しの一冊なので、本棚に収まった際には多くの方に読んでもらえると思います。

情報工学科 3 年 上野 大輔

私は普段、本屋に行ってもあまり歩き回らない。お目当ての本を買い、すぐに店を出るか、せいぜい漫画コーナーを散策する程度だ。新しい本に出会うことは殆どない。そういう意味では、このブックハンティングは、新しい本と出会う良いきっかけになったと思う。今回、まず初めに国内小説のコーナーに足を運んだ。友達に頼まれた本を買うためだ。友達やクラスメイトのほしい本、好きな本が知られるのもブックハンティングの良い所だと思う。続いて専門書のコーナーに向かう。一人当たり 1 万円分の本を購入できるため、普段は高くても買えないような本が買える。このように良いことづくめなので皆さんもぜひ、図書委員になってハンティングしよう。

電子機械工学科 4 年 岡崎 駿

今回のブックハンティングは例年と違い、色々な人からリクエストがあったので本を探すのに手間取りました。毎年参加しているのですが、一年生の時に興味があった本棚と今見ている本棚が全然違うので面白いなと思いました。

情報工学科 4 年 的場 遥佳

私が初めてブックハンティングに参加したのは、図書館に選定図書として置かれていたある 1 冊の本がきっかけだった。魅力的な紹介文が添えてなければ手に取らなかっただろうし、誰かが選んでくれなければそもそも出会えなかったかもしれない。最後の機会である今回も、私も誰かのきっかけになればという思いで参加した。5 年間通ったからこそ必要だと感じたものをはじめ、様々なジャンルの本を選んだ。私が選んだ本も、誰かにとって特別な本になること願う

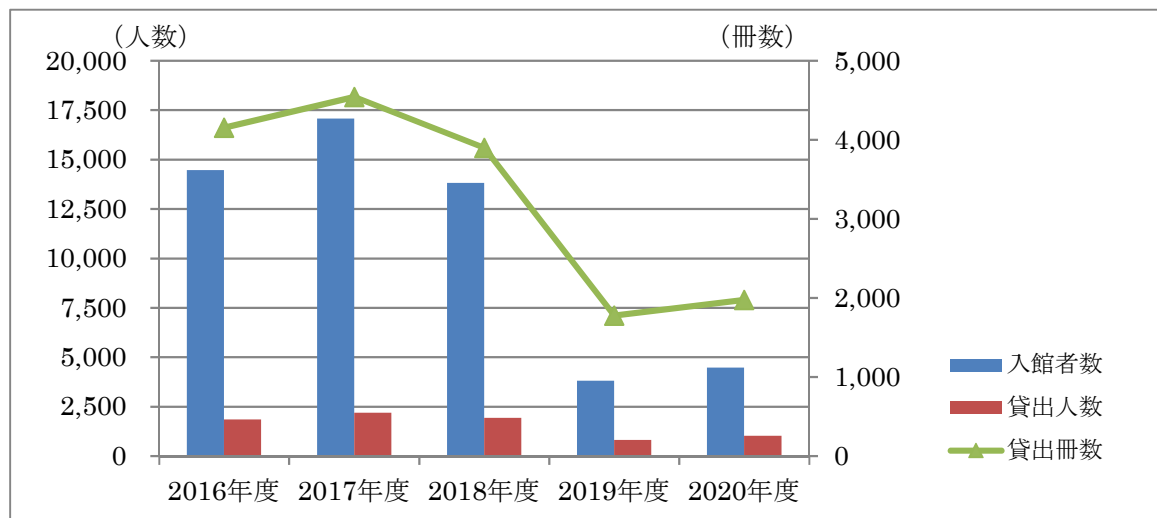
情報工学科 5 年 村上 結香



図書館利用状況

令和 3 年 1 月 31 日現在

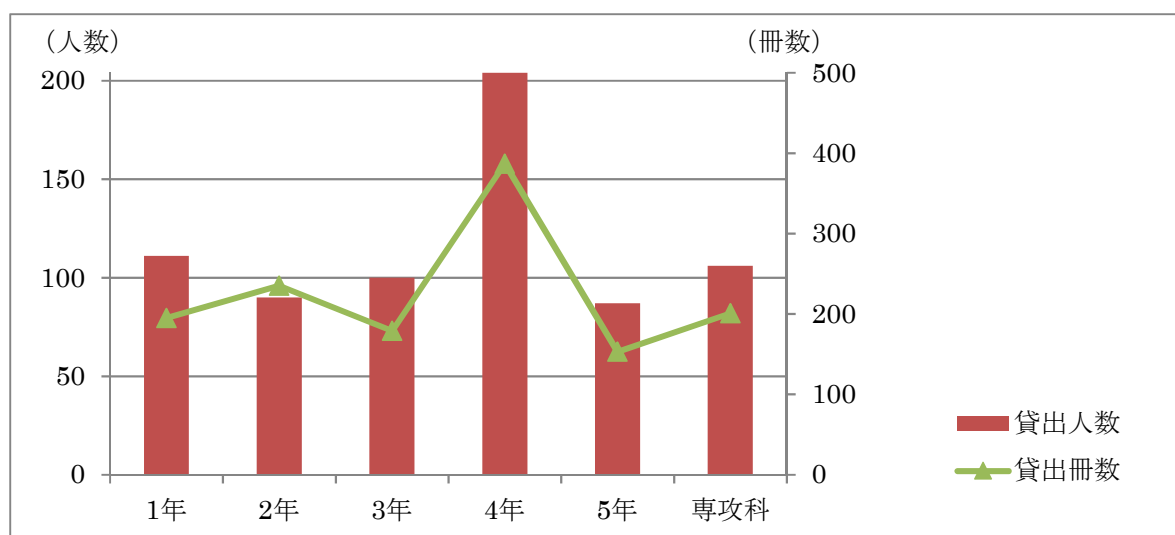
年度別入館者数・貸出人数・貸出冊数



	2016 度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度
入館者数	14,464	17,077	13,814	3,805	4,466
貸出人数	1,842	2,182	1,928	818	1,015
貸出冊数	4,152	4,542	3,900	1,777	1,977

2019 年度は図書館改修工事のため 6 月から臨時図書室を開設、2020 年度は新型コロナウイルス感染対策のため閉寮・時間外閉館のため入館者・貸出実績ともに減少

2020 年度学年別利用状況



	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	専攻科
貸出人数	111	90	100	204	87	106
貸出冊数	195	235	179	387	153	201